

忌避レーザーの照射装置を載せたドローンと操縦者＝千葉市若葉区



鳥インフルドローンで対策

ハト、カラスなどの野鳥

レーザー照射で追い払う

小型のドローンからレーザー光線を出し、高病原性鳥インフルエンザを運ぶ野鳥から養鶏場を守る仕組みをNTT東日本のグループ会社が開発した。まもなく感染が発生しやすい冬季。昨シーズンの感染件数が全国最多だった千葉県は、導入費用を補助する制度を設けて養鶏業者の対策を後押ししている。

小型のドローンからレーザー光線を出し、高病原性鳥インフルエンザを運ぶ野鳥から養鶏場を守る仕組みをNTT東日本のグループ会社が開発した。まもなく感染が発生しやすい冬季。昨シーズンの感染件数が全国最多だった千葉県は、導入費用を補助する制度を設けて養鶏業者の対策を後押ししている。

同社によると、鳥にとって赤い光は虫などの食べ物に見える一方、緑の光は目を守る習性から本能的に嫌がる。そこでハト、カラス、ムクドリなどの野鳥を赤い光で一度おびき寄せてから、緑

の光で追い払うことで、同じ場所に寄りつきにくくする仕組みだ。人体への影響はないという。ドローンは飛行範囲を設定して自動航行させることも可能で、導入費用は約300万円という。鳥インフルエンザは、感染した野鳥が鶏舎に侵入したり、ふんを通じてウイルスが持ち込まれた

りして広がるとされる。現在は防鳥ネットや消毒などによる対策が主流だが、限界もあった。同社が今年1～2月に神奈川県で実施した実験では、月に8日間ドローンからレーザーを照射したところ、80羽ほどのカラスの群れがいなくなっ

たという。担当者は「効果は約1カ月。定期的に飛ばせば効果がある」と話す。同社はこの取り組みを全国展開したい考え。ハトなど鳥類による食害防止のほか、イノシシやシカなどの動物にも効果があるとの実験結果が得られたといい、応用も検討するとしている。

農林水産省のまとめでは、鳥インフルエンザは、鳥インフルエンザは昨秋から今年初めまでの昨シーズン、14道県で51件発生し、養鶏など約932万羽が殺処分された。特に千葉県北東部では感染が続発して全国最多となる16件のほり、330万羽以上が殺処分になった。

このため、千葉県は今年7月、感染対策の導入費用の3分の1を補助する制度を創設した。今回のドローンも対象になるという。

昨シーズンに自身の経営する養鶏場で感染が発生し、鶏約14万羽が殺処分されたという同県旭市の男性(55)は「防鳥ネットなどすべてやっても感染した。できることは何でもやりたい」と話した。(中野夢)